

造られた物ではなく、造り主をおがむ

ローマ人への手紙 1章 16-32節

はじめに

今日は、年に一度の野外礼拝で、自然に囲まれた中で礼拝をしています。せっかく自然の中で礼拝をするので、何か自然に関する聖書箇所はないかと思い巡らしていた時に頭に浮かんだのが、今日の聖書箇所です。

1. 神の本性・永遠の力・神性は、被造物によって認められる

20節をもう一度読みます。「**神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです**」。

神様は、御自身の存在を、神様が造られた物を通して、私たちに明らかにしておられます。自然もその一つです。私たちは、大自然の素晴らしさを見る時、また繊細な自然をよく観察する時、何か自然や人間を超えた存在がいるのではないかという思いを抱きます。私たちはまた、自然災害などで、自然の脅威を感じる時もあります。その時にも、私たちは何か、自然を支配する存在がいるのではないかという思いを抱きます。

自然は、人間や自然を超えた方が存在することを私たちに教えます。漠然とした神という存在がいるのではないかということ、私たちに感じさせます。

私たちクリスチャンは、聖書を通して神様という方を知っています。聖書を通して、神様という方が具体的にどういふ方かを知ることができます。

しかし神様は、自然を通して、御自身の存在を私たちに知らせています。しかし、それはとても漠然としています。自然や人間を超えて、それらを支配している神的な存在がいるということ、私たちに知らせています。

だからこそ、世界の初めからあらゆる民族に宗教が存在します。それは、いつの時代でもすべての人が、何か神的な存在がいるということを感じているからです。

神様は、神様が造られた被造物を通して、ご自身の存在を私たちに知らせているのです。しかしそれは、とても漠然としています。ですから、自然を通して神様が具体的にどういふ方かを知ることができません。自然を通して救いの道を知ることができません。自然には限界があるのです。自然は、ただ漠然としか神様の存在を知らせてくれません。

私たちが神様について具体的に知るためには、聖書を読まなければなりません。救いの道を知るためには、聖書を読まなければなりません。神様は、自然を通して漠然と御自身

の存在を私たちに知らせ、聖書を通して具体的に御自身の性質と救いの道を知らせてくださっているのです。

聖書が私たちに伝えていることは、すべての人は、自然や人間を超えた神様という方が存在するということを漠然と感じているということです。すべての人は、目に見えない何か大きな神的存在がいることを感じているのです。それは、神様が、自然などを通して、すべての人に明らかにしているからです。

2. 造り主の代わりに造られた物を拝み、仕える人間

すべての人は、神という方が存在していることを感じています。しかし、その方がどういう方かを知りません。その方が何を求めているかも知りません。それらは、聖書を通してしか知ることができないからです。

聖書を知らない人は、神という方が存在していることは感じているけれど、その方をどのように礼拝すればよいのかを知りません。だから聖書を知らない人は、自分なりのやり方で、間違ったやり方で神様を礼拝してしまうのです。

それはどのようなやり方でしょうか？それは、25節にあるように、「**造り主の代わりに造られた物を拝み、これに仕える**」というやり方です。聖書を知らない人は、神という方が存在していることは感じているけれど、神様がどういう方で、何を求めている、どのように礼拝をすればよいのかを知らないで、神様御自身ではなく、神様が造られた物を礼拝してしまうのです。例えば、山を礼拝したり、石を礼拝したり、木を礼拝したり、動物を礼拝したり、カリスマ的な人間を礼拝したりしてしまうのです。つまり偶像を礼拝してしまうのです。

現代では、文明も発達して先進国では、自然や動物を礼拝する人も少なくなりました。しかし現代の人たちも、聖書を知らない人は、偶像を礼拝しています。現代の偶像は、お金や仕事や家庭などです。人生の成功や世の中によって作り上げられた幸せなどの偶像です。私たちが神様に従うよりも、それらを手に入れるために必死に生きているなら、私たちはそれらの偶像を礼拝し、仕えているのです。

3. 神の怒りとしての「引き渡し」

18節には、「**不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対して、神の怒りが天から啓示されている**」とあります。神様は、神様御自身ではなく、神様が造られた物を礼拝し、仕えている人たちに対して、怒っておられます。そして、その怒りを具体的に私たちに現しておられます。

神様は、どのようにして神様御自身を礼拝しない人たちに、怒りを現わしているのでしょうか？それは、24節、26節、28節に出てくるように、「**引き渡す**」ということを通してです。つまりそれは、好き勝手にさせる、放っておくということです。

私たちは子育ての中でも、いくら言い聞かせても言うことを聞かない子どもに、「もう勝

手にしなさい」「もう好きにしなさい」と言う時があります。それと同じように、神様も、神様を礼拝しない人を放っておかれるのです。神様を礼拝しない人が放っておかれると、どうなるのでしょうか？私たち人間には罪があるので、神様に放っておかれると、心の欲望のままに汚れに向かって行きます。また恥ずべき情欲に向かって行きます。また良くない思いに向かって行きます。その結果、性的に乱れたことを行なうようになり、29-31 節に書かれているように、「あらゆる不義と悪とむさぼりと悪意に満ちた者、ねたみと殺意と争いと欺きと悪たくみとでいっぱいになった者、陰口を言う者、そしる者、神を憎む者、人を人と思わぬ者、高ぶる者、大言壮語する者、悪事をたくらむ者、親に逆らう者、わきまのない者、約束を破る者、情け知らずの者、慈愛のない者」となっていくのです。

神様の怒りは、私たちが放っておかれるという形で現わされます。私たちには罪があるため、神様に放っておかれると、罪の中にどっぷり浸かるしかなくなるのです。ですから、神様に放っておかれることほど、恐ろしいことはないのです。

4. 福音のうちに現わされた救い

しかし神様は、私たちが放っておかれませんでした。17 節には、「福音のうちには神の義が啓示されています。その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです『義人は信仰によって生きる』と書いてあるとおりです」とあります。神様は、イエス様をこの地上に遣わして、イエス様を信じる信仰によって、私たちが救おうとされました。イエス様は、私たちの罪を十字架で償い、三日目に復活されました。そのイエス様を信じる私たちは、罪が赦され、救われ、新しく生まれ変わることができたのです。神様が造られた物ではなく、神様御自身を礼拝できるようにしてくださったのです。この神様を礼拝することができる命こそ、新しい命であり、永遠の命です。

おわりに

私たちは生まれた時から、神様を礼拝することができたわけではありません。私たちは、神様の恵みによって、新しく生まれたからこそ、新しい命を与えられたからこそ、神様を礼拝することができるようになったのです。

私たちは本来、神様に放っておかれて、罪の中で苦しんで生きる他ない存在だったので、しかし神様が私たちが放っておかずに、私たちが愛し、私たちが選び、私たちがイエス様によって救い、私たちに神様を礼拝する新しい命を与えてくださったのです。

私たちは今、自然を見る時、神様がこれを造られたことを信じています。そして、その神様がどのような方であるのかを聖書を通して知っています。その神様が、三位一体の神であり、私たちが愛してくださり、私たちと永遠に共にいてくださる神様であることを知っています。私たちは自然を見る時、神様御自身をほめたたえ、神様御自身を礼拝することができるようにされたのです。